

日本大学工学部

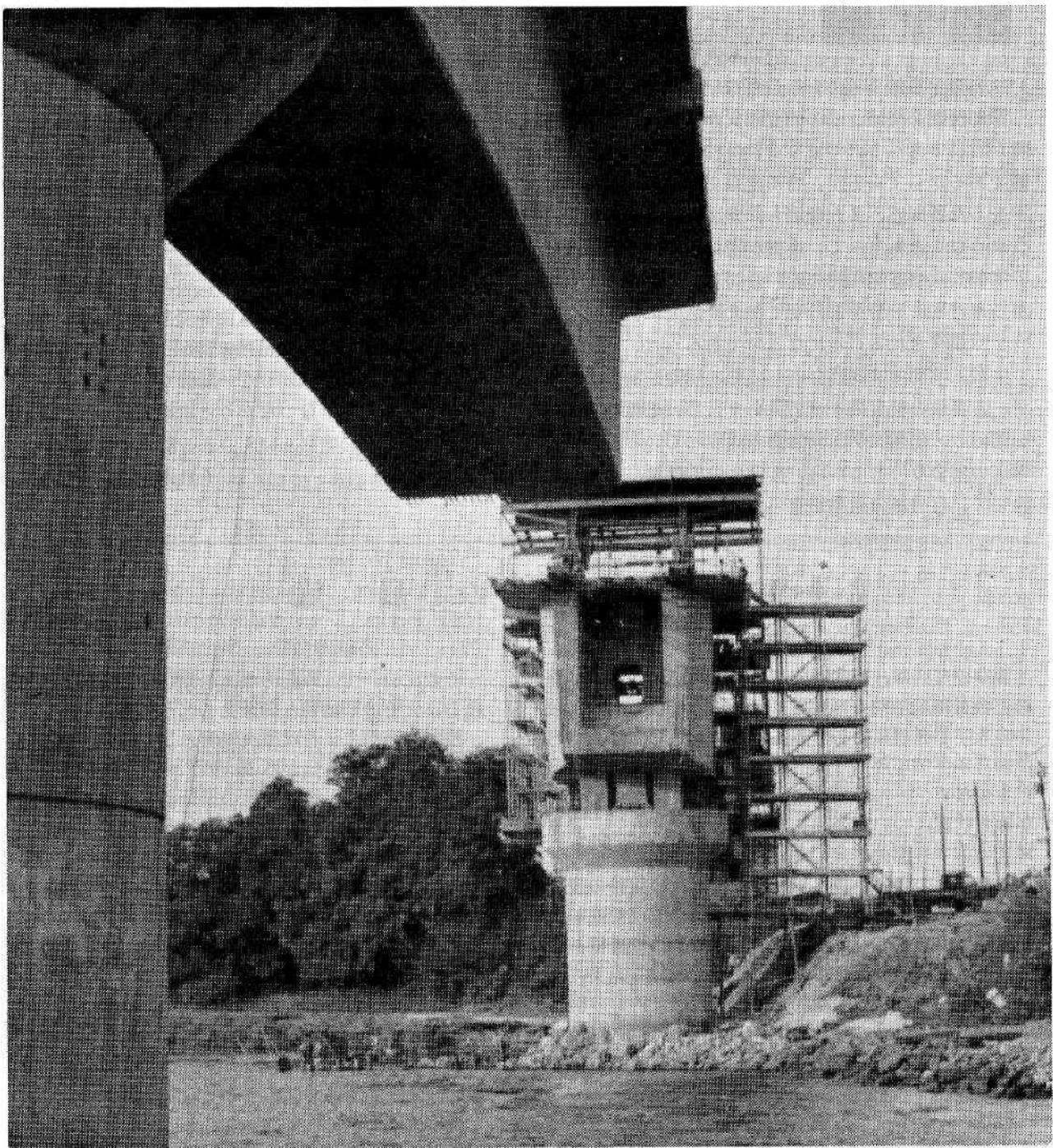
# 校友会報

第 26 号

昭和49年12月10日

## 目 次

日本大学校友会本部長ご挨拶	2
工学部校友会の展望	2
北海道支部結成	3
図書便り・学部祭	3
現代の科学と技術	4
工学部だより	
防災実験見学記	5
就職指導余話、その他	6
海外視察記	7 ~ 10
校友の所感と職場だより	10 ~ 12
事務局だより	12



日本大橋の下流にかかる東北新幹線、阿武隈川橋梁。ディビダーグ橋  
梁で鉄道橋としては世界最長（1径間 105 m）

## 校友会雑感



11月、あわただしいように支部の総会が行われる。役員総会等の折々、校友会会員名簿の整備をお願いしているせいか、何処の支部でもその整備に力を貸してくれているので着々出来上がって来ていることはうれしい。校友会の活動は、あるいは名簿から始まるのかもしれない。

学部校友会では、その成立年代が若い程、名簿の作製が容易であろう。つまりそれは校友各自の在所が明確であるからであるが、特に理系の学部は同系列の勉学をした者同志、また職場も非常に関連しているというようなこともある、連繋が密なのである。特に工学部校友会は年代的に若い者同志、一層そうした繋がりが若さにものを言わせてか大変活発に、また会もうまく運営されることになるのである。

生産工学部では同窓会としてその活動を始めているが、各専攻の科が夫々その科をまとめ、そこから役員を選出し、生産工学部同窓会を結成している、若い者同志の集まりであるから、その会の活動は、損得を超えて、自分達の活動が直ちに大学の発展に寄与出来

日本大学校友会本部長 柴田勝治

るという考えを持って行動している。

「自分達の卒業した大学なのだから、その大学に感謝すると同時に、大学が大きく発展するよう協力しなければいけない。それは同時に大学と共に自分達を大きく形成するものだ」という純粋な校友としての活動を念願している。そしてこれこそ又眞の校友会活動の在り方であると考える。工学部校友会がこのような心意気にもえて活動し成果を上げているのを見ると、理工系の学部が、卒業生相互のつながりを更に深めて発展するのが期待できる。

兎に角、若い世代が若い力をもって相互依存、網のように張りめぐらして活動している校友会の動きを見ると一驚すると同時に敬意を表したい。

特に、大学の近況とか、そうした校友各自の消息等を知ることが出来たら、卒業生としてそれはどれ程嬉しいことではないだろうか、そうした意味からもこうした会報の発行されることは、いよいよつながりを強くするものである。困難な仕事であっても行いたいものである。それが校友相互の繋がりを密にすることであり、学校とのつながりを一層強くするものである。今後ますます強力なつながりと組織をもって校友会の発展に力を注いでもらいたいと、望んでやまない。

(日本大学常任理事)

## 校友会の展望

校友会会长 太田雄八郎

ここにおいて、本会の今後を期して、次の諸点を提起し、大方の御批判と御意見を乞う次第です。

校友会会則によれば議決機関として総会、役員会、理事会、専門委員会がある。(第7章第27条)、総会は現行のままとしても特に本項の役員会を構成する評議員(18名)を現在は理事会が推薦して、会長が任命しているが各学科、卒業年次に関係なく選出するため会員の意の最大公約数を集約したことにはならない。これを各学科の各卒業年次から1名或は2名程度の評議員を選出していただき、理事会の推薦をうけ、会長が委任する形としてはどうだろうか。

勿論、全国各地にて御勤務の方々が多いだろうから「郵便方式」を取り入れ提言や意見、意志は手紙にて集約することにすれば、第二級の議決機関を通じてかなりの公平な意見が反映できるものと思う。

更に現在東京、東海、北海道と三支部を擁しているが将来は全国に十支部ほど設置し、各支部長には現行

我が校友会は、昭和33年5月に、学術研究の推進援助と会員相互の向上親睦をはかることによって、母校日本大学の発展に寄与することを目的として結成されてから本年で16年になる。当然ながら発足当初は会員数も少なく、どんな事業や行事についても会員すべてが運営状況について容易に知ることができたし、又運営する方でも充分全員の意見を掌握することができた。

しかしその後の会員の飛躍的増加、社会状勢の変転等があり、校友会運営には、脱皮に次ぐ脱皮を重ねて、各年代に順応すべく、各年次の会長はじめ役員は、規約の改正補填、事業内容の検討変更、組織の充実、会員範疇の拡大、役員の増加充実、会費徴収内容の検討、事務局の合理化等。衆智をつくして運営に当り、出来るかぎり当初の志を伸展させて、今日に至ったものであります。

然るに、今後益々増加する会員と社会的使命の重圧は、現状維持の考え方を大巾に修正させようとしています。

のとおり評議員を委任し、支部長は地域を代表して役員会に出席し会務の運営に参加する。

要は本会の意志決定がより多くの会員の意見の集成によるものでありたい。

さて、本会が組織上いかに完璧でも経済的基盤がなくてはどうにもならない。蓄積した終身会費の目べりは激しく昭和50年度に会員名簿を発刊し郵送するものとすれば、その殆んどが消費され、今後の会の活動が危ぶまれる現状です。このためにとにかく今回の名簿は実費配布とすることは、緊急に必要な方策であります。

加えて、校友会費の入会金、終身会費の値上げも考慮しなければならない。又支部活動に本会業務の

一部を分担願って経費の温存を計りたい。その他校友ならびに有志から本会への寄附があれば大いに受けたい。勿論記載する内容等については充分検討しなければならないが、会報など、本会の発刊物に広告を記載して、経費の節減をも考えている。

この他日本大学工学部校友会学術振興会の設立、就職推進委員会、支部長会、科別部会、活動資金の調達を計る財務委員会などの設置とか、校友の職域交歓会、研究発表会とか組織、経理、事業と各面で建議されなければならないテーマは沢山ありますが、今回は紙面の都合で割愛します。

会員諸氏の提言と御批判を待つ次第であります。

(筆者 土木工学科第3回卒業 郡山市役所土木課長)

## 北海道支部結成

東京支部、東海支部に続いて多年の念願であった北海道支部が盛夏の7月20日札幌市北海道会館に於て北海道校友50余名、工学部校友会本部から太田会長、半沢副会長及び事業担当理事が出席し盛大に北海道支部結成総会が開催された。北海道校友佐藤彰氏(土木8回卒)の支部結成総会の挨拶に続いて、太田会長が来賓として、各支部を通じて工学部校友会の発展と工学部の繁栄のために、より一層の親睦を図り、北海道と郡山の距離間をなくそうと力強い挨拶があった。議長には芦田淳氏(建築9回卒)が選出され、直ちに議事に入り支部結成総会の議案が提出されて、校友の活発な質疑応答のあと、各議案を満場一致で可決決定された。役員選出は支部長に新井三喜男氏(建築1回卒)が選出され、新井支部長は母校と校友会の発展と繁栄のために、北海道校友の親睦を更に深めようと挨

拶があり結成総会を閉会した。続いて工学部新田教授、宇野原教授、田嶋学生課長をはじめ同会館内で北海道地区工学部父兄会懇談会に出席された教職員の御出席を戴き、懇親会を開催し、学部側から学部の現況説明、スライド上映等の御協力を戴き、東京、東海支部と共に北海道支部の発展と校友の益々の活躍と健康を祝福して校歌を合唱し、日本大学の繁栄を祝して盛大裡に閉会した。

北海道支部役員氏名		
会長	新井三喜男	建築1回卒
副会長	武田興平	建築5回卒
"	猪股良悟	土木6回卒
"	園部敬次	機械7回卒
幹事長	佐藤彰	土木8回卒
事務局長	芦田淳	建築9回卒

(根本事業部長記)

## 図書

大学での研究や教育を語るのに、図書館をなくしてはできない。工学部には、現在約7万冊の書籍を有するが、学部は、たゆまずに充実の努力を重ね、間もなく10万冊になろうとしています。かねて計画されていた図書館増築の機運も熟し、此の度20万冊まで収容できる書庫を備え、学生の閲覧条件も大幅に改善されたかなりデラックスな図書館が完成した。校友会では、本年も30万円相当の図書を寄贈するが、書籍名は下記に示すものと同じで一連の巻号の中から選ばれる。

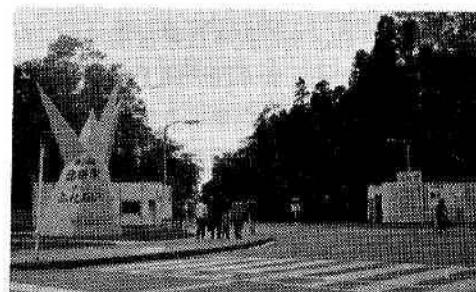
昭和47年度Landolt Bornstein 2-7、2-8、2-9、3、2/9、4/2/a、昭和48年度、La-

## 便り

ndolt Bornstein 2-4、2-2、2-6、4-3、と更に Neue Serie Gruppe 3、6



カットは日本大学工学部校友会より日本大学工学部に寄贈した蔵書に捺印されている本会の印である。年度欄は、寄贈年度を示す。



テの  
一文  
マ字  
「象  
形塔  
一鮮  
や  
ふれ  
か  
あ  
な  
い」  
門

## 学部祭終る

昭和49年11月1日から4日まで、恒例の日本大学工学部祭が無事終了した。本年は特にテーマを「ふれあい」に定め、騒々しい現代の世情に埋没していく、人間の心を掘りおこし、新鮮な社会生活を樹立せんとするあくなき希求の行事でした。催物は、学術講演会、展示会、みこしパレード、運動会、ダンスパーティー音楽祭、演武祭、映画会、寮祭、呼びものの防災実験などなど、教職員、学生、校友会役員、父兄会役員が一体となって協力し、予定の効果を上げて終了した。

# 現代の科学と技術



数千年の人間の歴史を見ると紀元前に栄えたエジプトやギリシャの科学技術と、200年前のヨーロッパの科学技術を比較すると、そう大きな進歩は見当らないような気がする。しかしその後の200年の足跡を見ると正に爆発的な進歩を示して

いるように思える。特に最近の急上昇は異常で、このままでは元素の核分裂の連鎖反応のよう、正に爆発寸前のようない状態になることであろう。

しかし天の摂理はよくしたもので、その警報としてエネルギー枯渇、環境破損の現象として現れ、ここで一大転機を余儀なくさせられているように思える。そもそも科学は人間の贅沢を満足させるために使用すべきでなく、科学の流れによって自然界も含めて全世界の美わしい共存を得るためにものでなければならないと思う。すなわちそれぞの理想とする道を矛盾なく調整して行く技術を開発するものとしてのみ科学が存在するのではないであろうか。

このような目的に向って科学を進めるにあたっては常に科学の目的とする極地を見つめつつ進めて行かねばならないのではないだろうか。自分の足許のみに心を捕われれば結局は目的に沿えない方向に何時しか向いていることがしばしば起り得ると思う。原子力を開発しようとして世界中を放射線で汚染するようなことあってはならないものであろう。

以上のような大乗的な立場から言えば過去において専門分野とされていた技術のみによってはどうにもならなくなつて来ているようである。電気、機械、建築、土木、化学など多くの分野の個々の技術の総合統一なくしてはどうにもならない状態にまで来ているようであり、しかも形だけ作る技術から質を作る技術の導入を余儀なくされていると思う。

過去の工業界を見れば形を作る技術が尊重され、かつこれに投資されて来た。工場において設計や製造に關係ある部門が尊重され、また大きな発言権があった。しかし材料節減、性能向上、安全性の向上などが強く要求され、かつ工業上の経済性が要求されれば、必然的に質的向上と合理性が求められるのが当然であり、その質を作る技術が今後の科学技術の向くべき方向でないだろうか。

筆者は溶接関係の分野で時を過して来たものであるが、自分の分野から見て、現在の科学技術をここまで

機械工学科教授 石井 勇五郎

育てた原因の一つに溶接の進歩が大きな寄与をなしたと思う。それは巨大設備や高圧設備または原子力工業は溶接なくして達成できなかったからである。

しかるに人間の行うことには完全なものではなく、工業設備に用いる材料に無欠陥なものはなく、またこれを溶接したものにも完全なものはない。多少の差はある必ず欠陥を含有するものである。したがって発見できずまた除去できない欠陥が存在することを始めから考慮に入れて設計しておかなければならぬ。過去における設計は無欠陥に近い小さい試験片による強度試験の結果を利用して、これに基づいて設計し、不明な因子による不安さを安全係数と言う非科学的なものでカバーして来た。この安全係数が1に近いことが望ましいことは当然であるが、そのためには材料内に存在する欠陥の発見と、外部環境から来る条件の解明を綿密に行わなければならない。前者の解決として非破壊試験の名の下に発展した材料の物性計測によって欠陥検出する材料評価工業の完成と破壊力学の結合がなければならず、後者の解決には自然環境の解明、地震の解明等が必要となる。

筆者の関係する材料評価の立場から言えば、今や鋼材の研究進展によって拡張力  $200 \text{ kg/mm}^2$  以上のものも実用化して来ている。したがって同じ物を作るのに軟鋼の  $1/4 \sim 1/5$  の材料で済むことになる。しかし一方このような材料に欠陥が存在すると軟鋼程度の強度低下になる。

それでこのような材料の欠陥検出限界はどの程度まで可能かを明かにしなければ有効に利用することはできなくなる。

一方このような欠陥の力学的挙動を明らかにする破壊力学等の発展も必要とし、また検出の方法を開発しなければならない。後者はあらゆる物理的性質を利用して、物性値の変化から欠陥の存在、形状寸法を検出するもので、物性の研究の発達に依存しているものであり、一工学的な分野では解決されなくなって来ている。

以上のように今後の科学は過去に存在した工学の専門分野の他に新たな分野を開拓し、それらの総合的な組合せによって発展して行かなければならなくなっているのではなかろうか。徒然に自分の専門に閉じ込もるごときは自からの発展を閉ざすことになると思う。人間に万能はない。したがって専門を異にするものが如何に融和し協力するかが今後の科学の進歩、否人類発展のための大きな問題であろうと信ずる。

(筆者 日本大学工学部教授・工博)

## 防災実験見学記

去る11月2日、日本大学工学部は、学部祭の行事の一つとして本格的な木造2階モルタル塗りの旧校友会館を試料として学術的に大変意義のある防災実験を行なった。本会にとっては貴重な会館でありましたのでこのような運びとなった説明と実験見学記をかねて以下報告いたします。

本会が、昭和33年に創設され、その1年後に現在東北工業高等学校実験棟の地に校友会館を新築したのであります。しかし、学部の都合により、昭和39年に図書館の東側に移設された。しかしその後、学内の整備計画が着々と進み、図書館増築が完了し、以前からその並びに予定してあった中講堂の建設に先立ち、本館を撤去することになった。

このために、学部は、校友会事務局の新しい館をかねて第52号棟を新築して、充分広いスペースを、事務所や会議室として提供されたのであります。

本会が、昭和48年4月に事務所を移転したことは、すでに御知らせしたとおりであります。

さて、旧館の処分であります。昨年、工学部の建築防災工学研究室から、取壊しても以前移設したことと経年老化を考慮すれば、あまり利用価値は期待出来ないので、許されるなら、全国でも例のない規模の防災実験を行ないたいとの提案がなされたのであります。異論があったので、この是非について、日本大学本部、工学部、工学部校友会などで慎重に検討した結果、此の度、学術的意義と経済的な理由から一年越しの論に終止符を打ち、頭初の提案のように処分することに決ったのであります。

安全を期すため、実験場は、東グランドの南側に設定され、家屋をここまで移動するのは大変なことであった。さて実験当日は、風速4.3m/sec、曇りがちの寒い日であったが、外木学部長以下多数の学部関係者、校友会関係者、消防関係者、更に学生市民など、約1,000名ほどの見学者が見守る中で、実験責任者、塙本教授の手で、実験の火は放たれた。



写真左は、移設され実験準備完了の館で南側より撮影したもの、右は着火後約15分経過した状況を示す。

同時に実験担当者から秒読みと室内温度や煙の拡散状況等が刻々とアナウンスされ実験場はしばし緊張と奇妙な期待に包まれた、1分、2分、と過ぎる中、煙が見え、火が見え、およそ10分ほどして、最早やどうにもならない状況を呈した時、人々は火の恐怖に打ちのめされ、改めて防火防災の大切なことを認識したであります。あの大きな校友会館は、約30分で完全に焼け落ちてしまいました。記録に右往左往したカメラマン報道関係者、消防署員、実験担当者は、貴重な資料を手に満足気に、実験の成功を喜んでいました。此の声に耳を傾けたとき、決してこの焼失が無意味でなかったことを改めて確信した次第であります。尚、此の実験報告書は、後日整理して発表される予定ですので、次の本紙で紹介する予定です。

又、本会では、実験開始から最後までの進行状況を写真で記録致しましたから、来会の折には見て下さい。次に実験内容を当日のパンフレットの一部を記述し、説明といたします。

『……旧校友会館は建築面積108m<sup>2</sup>、延べ面積190m<sup>2</sup>であって過去に行なわれた実験家屋よりも規模が大きい。火災実験は1階部分の1隅において燃料に点火し、1階が燃えひろがり、階段を通じて2階に燃えのびていく状況を、温度測定などによって観測する、又本館の側面に不燃布で覆った小屋をならべて、これらの延焼の状況を比較する。

耐火建築物の実火災で発生する煙は、火災によって生じた多くの悲劇の原因であり、煙への対処の仕方や除去方法について究めなければならない。このため、本実験に先がけ、外壁モルタル塗り、トタン屋根、ホール間取りの条件の本館で、煙に関する基礎実験を行なった。……』

参考のため当実験担当責任者について御知らせします。

工学部建築科教授 塙本 孝一

工学部建築科助手 倉田 正春



## ！？就職指導余話？！

### ~~~現代学生気質をめぐって~~~



明年3月卒業予定者の求人については、当初、石油・電力規制がおこなわれ、それに拍車をかけるように金融引き締めがおこなわれた結果、その影響をうけかなり求人が減るのではないかと予想されていたが、7月解禁になると、ことしも優秀な学生をもとめて、求人合戦となり、採用意欲がさほど落ちなかつたてんは注目される特徴のひとつである。

その理由についてはいろいろと挙げられるが、大卒の採用は一部の企業を除き慢性的な求人難であり、目先きの不況にとらわれ、採用を中止することは人材の断層をつくる。またこのような時期にこそ採用し、来るべき好調時の戦力を蓄える。不況時の採用中止は大学側の不評を買いつけるに支障をきたす。といった企業も少なくなく景気の動向とは別に、長期人事計画の対策が産業界の意欲をたかまらせた原因ともみなされる。

しかし、本年の大卒求人の全般にわたり好調であったわけではなく、業種企業規模によりまちまちである。とくに流通・非鉄金属・化学関係は採用が活発であったが、逆に、技術系では建設業・不動産業・電気機器織維産業などの一部には、求人の低下があり二つの明暗がみられた。

こうした就職状況下において戦後生れの学生は、就職に対し何を考えどんな意識をもっているのであろうか。幼児期より豊かな物質に恵まれ、戦無派時代の青年といわれる若い世代は、果して将来の日本の担い手として、どうだろうかという声をきくことがある。私は20代の若者と接する機会もかなり多いが、むしろ私個人つぎの世代が主流となる時代のほうが、暮しやすい日本になりそうな気がしてならない。

横山 勇一

昨年、突然おそったオイルショックで日本経済を混沌におとしいれたさい演じた、戦前・戦中派の行動が挙げられる。「1円でも安いうちに」と買いだめにはしり、他人より楽な生活をしようとする古い世代の狂乱的な買だめやうろたえ、さらに天下の商社が悪徳商法を展開し、国会の矢面に立たされて世上を騒がしたことは、つい最近のことである。

最近の学生の職業感については、戦後の深刻な就職難などの恐怖を知っている古い世代とは、うってかわって冷静な意識のもとに企業を選んでいる。ご参考までに述べれば、まずこの企業は自己の能力・性格に適合しているかどうかを、第一に重要視していることである。10年前頃、寄らば大樹といった入社時代とことなり、自分の性格にあっており、公害を出さない企業、そして時間的に余裕があるような職種を選び、何よりも自分の心にてらして矛盾を感じない企業を、ごくしぜんに選んでいる学生が多くなりつつある。要するに、公害を出さないということは、住民福祉のうえから大切なことであり、時間的余裕は国際的傾向であり、人の能力・性格は千差万別ではあるが、若い世代の間ではこのような余裕のある考え方により、選職されている現状である。

本学部、本年の就職状況を振りかえってみると、予想外に好調であったといえる。企業に対しては売手市場であり、学生はそれぞれ研究開発技術者、現場技術者・システムエンジニアを目標に、自己の適性・能力をみたす条件を基準に、将来性と安定性をじゅうぶん考慮に入れ、就職先の決定をみている現状である。

「将来独立したいが適した企業はありませんでしょうか」云々と、始めより希望をのべ来訪する学生もあり、フリーな立場で大きな仕事をしたいという、独立の可能性を求めるることは、よりよい生活と自己の成長と、生き甲斐を願うこころのあらわれであり、このような相談もノーマルな現代学生気質の一端かともいえる。

(就職指導室)

### ☆☆☆ミキル大学大学院 院生応募者推薦について☆☆☆

カナダ、モントリオール市にあるMcGill(ミキル)大学は、Canadian Society of Civil Engineersの機関代表であり、カナダ在留日本人の間では“カナダの東大”と言われる名門校である。

この度、コンクリート学専攻の本学卒業生をコーディネイトのため受け入れたい話がMcGill大学院科長R.G.Redwood教授よりあり、推薦者はコンクリート材料、構造の権威M.Saeed Mirza教授のもとで研究

生活を送ることになっている。

手続の準備は1月頃から始まり9月の入学までの間はR.G.Redwood教授のもとで研究生としての生活が約束されている。応募者は、昨年夏ミキル大学とWRRC(ワイアロープコンクリート)の共同研究を行っている、建築学科 師橋研究室にご連絡下さい。

T E L 0249 (44) 1300 内線349

### 昭和50年度学生募集

1. 募集科目 土木工学科・建築学科・機械工学科・電気工学科・工業化学科
2. 試験期日 2月19日(水) 郡山試験場・東京試験場
3. 試験科目 数学 数学I・数学II B・数学III 理科 物理B・または化学B  
外国語 英語B
4. 出願場所 郡山試験・東京試験とともに福島県郡山市田村町・日本大学工学部入試係
5. 試験場 郡山試験場～日本大学工学部校舎 東京試験場～日本大学経済学部  
日本大学工学部 福島県郡山市田村町徳定字中河原1 電話郡山(0249) 44-1300

## 海外視察旅行体験談

一般教育科助教授 梶川涉



今般の出張の主たる目的は、このところ研究を続けてきたイギリス現代作家グレアム・グリーンの作品の舞台となっている土地を訪れ、出来る限り足を使って歩きまわることにより、立体的にグリーンの作品を把握することでしたが、又同時に、今年度英語Ⅰのテキストとして、カーカップの「旅する心」という、いわば外国旅行の心得的な教材をとりあげた関係上、特に後期の授業に肉づけをし、学生の学習意欲を盛り上げる為の教授資料の収集をも心がけました。どちらの目的も十二分の成果をあげ得た事は申すまでもないことです、今回は紙面の都合上、旅行の途上経験した苦労のうちの幾つかに言及してみたいと思います。

グリーンの小説「第三の男」の舞台であるウィーンをまる2日間歩きまわり、かなり疲労を覚えていたので、次に訪れたアテネでは観光バスを利用することにし、ホテルのフロントで切符の手配をし、ついでに乗車場所を地図上にしろしてもらいました。翌朝8時30分発にあわせ8時05分にホテルを出ましたが、すぐ近くの筈なのに行けども行けども乗場として指定されたマルマラ・ホテルがみつからないのです。後に判明したことですが、フロント係の感違いで道路の左右を逆に教えられた結果だったのです。このことがあって以来、観光バス利用の際は予め前もって乗場を確認するように心がけました。おまけに、やっと間に合って乗ったバスでアクロポリスを見学し、暫時自由行動の後再びバスに乘ろうとしたところがバスがみつからないのです。降りる時車体横の302という番号を確認しておいたのに、どのバスも皆302なのに驚いてしまいました。観光バス利用の際は必ずプレートのナンバーを確認しておくことが必要であると痛感した次第です。

次にミラノからスイスのインターラーケンに向かう場合の事でしたが、日本で入手しておいた鉄道乗車券に記された経由地が全く見当外れであった事がわざわざして、幾つかの窓口へたらい回しされ、イタリアのこととて英語も殆ど通じない為2時間も苦労したあげく、翌日車内で差額として7ドル支払う破目になり、やっとのことでインターラーケンに到着し、駅の案内所で念の為次の旅程のインターラーケン→チューリッヒ間の乗車券を確認してもらったところ、これ又とんでもない遠回りのもので、実際には50分で行けるところを、3時間もかかる遠回りの乗車券になっていた事を知り嘆息をしてしまいました。その後しばらくは快適な旅が続き、ロンドンで10日間過し、いざパリに

向かう段になり、フライトの予約再確認の為West London Air Terminalを訪れたところ、予約が為されておらず、係の話では日本の旅行代理店のミスであろうとのことで、やむなくBritish European Airwaysの便に変更、次いでパリ→ニース間のフライトも、パリ到着時にドゴール空港にて再確認しておいたにもかかわらず、どうしたわけかキャンセルされている事を偶然日航のオフィスを訪れた際に知り、憤慨やるかたない思いをしたものでした。滞在するホテルについては、イギリスおよび他のヨーロッパ諸国内では、空港又は駅の宿泊案内所で当方の希望にそなうホテルを世話をもらったのですが、スペインのグラナダでは空港に案内所もなく、市内のイベリア航空のオフィスに依頼してホテルを探してもらったところ、どこも満員。近くにTurist Officeがあるからそこへ行ってみるほかに手はないと言うので、地図を頼りに行ってみると、「ここではホテルのリストを提供するだけで、いちいち斡旋はしません。」とのこと、ほとほと困ってしまい、なんとか世話して欲しいと頼み込んだところ、3人居る係の1人が、「これはあくまで個人的サービスですよ。」と親切にもリストに記載されているホテルに次々と電話をかけてくれたのですがやはりどこも満員。さすが親切なその係ももうどうしようもないという表情でしたが、「そうだ、ごく最近新しいホテルが出来た筈だ。まだ開店していないかも知れないが、念の為電話してあげよう。」その結果幸運にもCarmenなる新しいホテルが2日程前から客を受け入れており、やっとの事で宿を得ました。その係はにこやかに、「本当によかったです。」と握手の手をさしのべてくれました。まさに地獄で仏ともいいくべき感一入でした。訪れる国によつては、特に地方都市を訪れる時は、事前にホテルの予約をしておいた方が無難のようです。旅の後半に入り、ニューヨーク、バッファローを経てワシントンに向かう日の朝、ワシントンでのホテルの件で日航のオフィスに電話したところ、その翌朝ワシントンからメキシコのメリダに向かうべきナショナル航空がストライキの為運休というとんだハブニングがおこり、突然のことでもあり、ワシントンの日航オフィスでいろいろ手をつくしてくれたにもかかわらず、それ以降のスケジュールを大忙に変更せざるを得なくなり、日程を短縮して帰国する事になったのは返す返すも残念でした。

以上のように、種々の苦労はあったものの、外国语教育にたずさわるこの身にとっては、それらも亦貴重な体験にほかならず、このたびの出張の成果を今後の研究および授業に活かさんものと心に期している次第です。末筆ながら校友諸氏の御健闘を祈り居ります。

## カナダ、アメリカ木造住宅視察

武田仁幸

今年の8月、外国の森林資源や木造住宅などについて関心をもっていた私は、絶好の機会を得たので、盛夏の午後2時、暑い羽田を後に、2週間の旅に出た。

先ず到着したのは、シアトルである。のんびりした税関吏に気をもみながら入国手続を終了する。

日本の面積の27倍、人口は2,000万と5分の1、このように空間が大きいためか、身体も大きいし、気性も鷹揚で、どうも日本流のせっかちは通用しない。まよ此々は他国、郷に入っては郷に従うことにした。

かくする中、ロビーには美しい日本女性が待って居た、通訳の石原さんである。以後、彼女の案内で各地を視察した。バスにて木材を積出すタコマ港を見る、直径1m以上もの木材が、処狭ましと野積みされ、運搬車が行き交う、日本では主として直径80cm位のものが輸出され、名古屋、静岡の港で陸揚げされていること、幸い来合させていた貨物船、金岡丸の船内を見学した。タコマ港を後にした一行は簡単な手続でパンクーバーに入国した。

生産能力が米国で第8位の製材工場を視察する、規模の大きさに目をみはる。製品は、10cm角材とツーバイフォー工法に使用する2インチ×4インチ材である。カナダではこの外、三社ほど製材工場を視たが、原木の利用状況は、木材・製品55%、チップ35%、残り10%はクズだそうである。

日本でこんな操業したら直ちに破産だと同行した製材会社の社長は嘆いていた。あとで訪ねたプリンスジョージ市の製材工場でも同様の答えであった。

この市は別名スプラス（木名）の街とも言われ、日本では、白く美しい外材として、多くの住宅にも取り入れられている。

カナダでは80年を周期にして木材を生産していると言つておりましたが、日本では、40年周期である。良質の木材を生産するにはやはり80年周期が理想のように思われる。余談だが、酒屋の仕入樽は樹令80から120年位の木材を用いるのが最良とのことだから、日本の現状では、酒にヤニが溶入して美味しい酒は飲めそうもない、ホーローの酒樽に変ってきた理由もある。

さて、カナダはどこに行っても“森林の国”の名に恥じない立派な国である。美しい湖に囲まれ、その湖畔に建つ木造住宅には、良く手入れされた芝草の広い庭が十メートルほど向うの道路に垣根もなく、続く、朝と夕の2回おこなう芝の手入れには、草花を愛する国民性が

しのばれる。

カナダブリティッシュコロンビア洲の職業訓練学校を視察する。大変規模の大きい学校で、日本のものは、問題にならない。各職種の生徒が一生懸命勉強していたが、徒弟制度のない大工さんは、この学校で1年学び、2年目から現場で、実務をしながら技能を習得して4年間で一人立ちするそうです。又、その上に監督者養成学校があり、市の経費で経営されておるとのことだった。カナダの住宅は、これらを卒業した大工さんが主となって、良質の材料を豊富に使用して作られたものである。又、日本のように建主の注文住宅ではなく、アメリカと同じく、全部建売住宅で、各デベロッパーが、独自のプランで売出しておるようでした。住宅の様式は、地階を自動車が2台に入るスペースの車庫と、洗濯物の干燥室、機械室、物置。2階が居室部分で、特にトイレ、シャワー室が多ければ高価なようであった。

カナダの日本語の上手なデベロッパーの支配人は、“現在日本には建売住宅があるが、更にマンション、即ち大邸宅の売物がある”。私にはカナダのマンションは買つことは出来ないが、日本のものは買つことが出来ると揶揄して笑っていた。実際、シアトル、パンクーバーの高級住宅街を視たが、もう日本のそれとは別世界である、数十の部屋、メイドを雇い、庭の大きさと言うよりも、敷地を千坪単位で説明されても、最早や何をかいわんや、だ。

低所得者の住宅でも、約200坪の敷地に、延坪にして70坪から90坪の家が建ち、夫婦を主体にした部屋割で、実際に生活に、気候にマッチした住宅が建てられている。

パンクーバーからカリフォルニアに来て見たものは、カナダにもあったそうだが、“日曜大工店”である。建築に必要なものは、ドアからベランダ用品、金物は何でも、これらメイドインジャパンも含めて、更に又本、セメント、タイル、ジュウタン、カーテンまで揃えてあるのには、目をみはる。この種の店は郊外にあって、建物の修理などは手軽に出来るシステムになっている。アメリカでは、建坪約15から20坪位で、車が付いて移動できるモービルホームズが売られている。各地にモービルホームズパークなる団地があり、ここに集落されている。住人は、団地とモービルホームを買えば、トレーラーが家を運搬して来るという様式である。この建物は税金が安く、ツインルーム、ダイニ

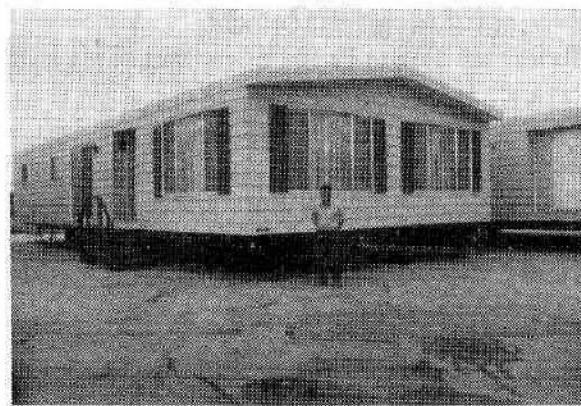
ングルーム、シャワールームだけだが、大変立派にできていた、主として老夫婦に好まれているとのことであった。ロスアンゼルス郊外に広大なデベロッパーがあった。高中低所得者を地域的に分割し、オフィス街、工業地区などにも分け、数十年の考えのもとに施工し



中所得者向け建売住宅(カナダ)

ているとのことであった。あまりに広く、時間の節約もあるので数時間で、ほんの一部、整地から建売までの工程を視察したが、日本の現状と比較して、実に多々考えさせられた次第である。

(筆者 土木工学科第3回卒業:東和工業KK社長一郡山市)



モービルホーム前にて

\*\*\*\*\*

## 欧州研修旅行記

日本大学工学部機械工学科4年 石丸正

『8月3日 晴れ 朝8時ロイヤルホテルを出発、清潔しいが、濃霧のため視界わるし』  
一人、下宿の四畳半の部屋で、旅行メモを捲っていると、このような文字が、目に飛び込んで来た。これはスイスのINTERLAKENからZURICHに向う日の箇所である。もう少し読み進んでみよう。  
『自転車、キャンピングカーなどを、車窓より見る。8時30分、霧が急に晴れだす。眼前にスイスの山々が忽然と現われる。正に忽然とである。今ここに、雪舟が居たなら、いかに壮大な、霧の晴れようとする山々露出した石塊を書き上げたであろうか、と思う。』  
すでに、3ヶ月もたつのに、私の頭の中では、この壮大な光景が、パノラマのように広がり、心を遊ばせるに十分美しく、新鮮にのこっている。欧州旅行中一番印象深かったのも、このスイスである。

この、欧州研修旅行は、欧州6ヶ国、言語・習慣・風俗などの違う国々を訪問し、広範囲での見聞を広めることがその主旨である。しかし、私にとって重要なことは、この経験が私のハートに、どれだけの青春の足跡を残してくれるかということであった。

斯くして今、私は、この旅行が、私の青春を飾る、1ページであると感じることが出来る。

目を閉じると、羽田国際線ロビーのアナウンスから始まる興奮の連続に、私の心は、溶けこんで行く。アリタリア航空機に乗り込んでからの外国語との付き

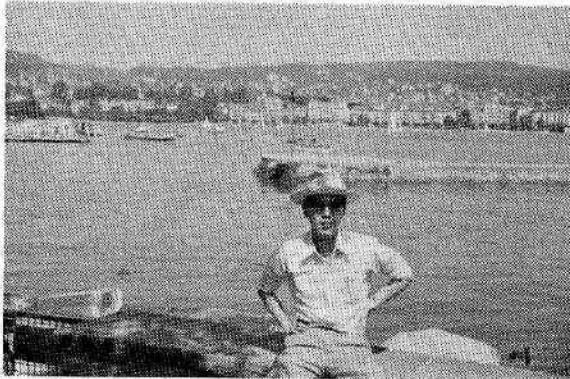
合い。機内食の美味しかったこと。なんとか通じることで自信をつけた、バンコック空港での英語の遣り取り。ROMEのレオナルドダビンチ空港という名に親しみを感じ、如何なる観光客にも動じない、壮大な、バチカン市国サンピエトロ大寺院(Basilica di San Pietro in Vaticano)、コインを後向に投入すると、再びローマに来れるというテレビの泉(Fontana di Trevi)、憧れの地中海とNAPOLI古代都市POMPEI、我が思い出のFLORENCE、MILANOにある歌劇の殿堂スカラ座、Grazieという言葉に馴れたころスイスに向い、その車窓の美しさ。真夏に、雪を踏んだ、Jungfraujoch それにつらなるEiger、ここでカメラの虚しさを痛感。家光が、日光の山々の緑と金色とを対比させたという美感より優れていると思われるZURICH郊外の家々の色合、自然の緑の中の小さな花、野の花の美、である。シェークスピアの物語を思わせる。HEIDELBERG城、日本の重工業の進歩を見直したDaimler-Benz AGの工場と自動車博物館の見学。ヒットラーの残した数少ない有益な遺産の一つ自動車専用高速道路のAutobahn。詩吟を披露したMAINZでの交歓会。ライン川下りで飲んだラインワインの快さ。AMSTERDAMからPARISへ向う国際列車の中での子供達との交流。のんびりコーヒーを飲んだシャンゼリゼのカフェテラス。

見るので1日かかったルーブル博物館(Musée du Louvre) セザンヌもあった。ミロのビーナスもあった、モナリザも、ドガも、そしてミレーの『晩鐘』も。ユトリロの世界を夢見て、失望したモンマルトルの丘。船酔いで総倒れになったのも知らずに眠って渡ったドーバ海峡。夏目漱石が不愉快になったのが判るような気がした、霧の都LONDON。

Tower of LondonもBritish MuseumもHyde Parkも、実に落ち着いていた。千円もするかけそばを食べたのもこのLONDONだった。寂しさと嬉しさが交互に交錯していた帰りのジェット。北極の氷の上も飛んだ、アラスカのマッキンレ山脈の上も飛んだ。アンカレッジ空港の水は、美味しかった。そして、夕日に輝く雲海の向こうに迫り出た、富士山を見た時の得も言われぬ感動正に、想い出は、走馬燈のごとくに、私の頭を駆け巡って行く。

ともあれ、この旅行で、私の日本人であったことを痛感した。しかし、我々若者は、内を見て、外を見、外を見て内を見なければならないと思う。

帰国後、私は、遠い九州の親友から、「歐州は、どうでしたか? 私もいつか行ってみたいと思います。イスラエルには、花が咲いていたでしょうね。」と云う短いハガキを受け取った。彼もまた、青春を生きている一人なのだ。私も彼に、返辞を出さなければならない。歐州にも、美しい花が咲いていたと。……



チューリッヒ湖にて

### 校友の所感と職場だより

## 40代を迎えるにあたって

半 沢 忠

近隣の山々はすっかり雪化粧し、今年も数日で終ろうとしているが、月日の立つのは早いもので卒業して早くも18年になりました。来年は30代とも別れ、40代に入り、いよいよ年ですねと云われる世代を迎えます。40代を迎えるにあたり、心の中は正直いってピントきませんが、思えばこの世に生を受けてから39年の間、色々な人々に接し、お世話になり現在の自分と云うものが出来上ったわけです。幸か、不幸かは別問題として、少なくとも今日迄生きてこれたことに対して感謝せざるを得ない。

学生時代40代の人々を見ると年老いた中にも何か人生の苦労のあとがにじみでていた様に感じていたが、いつのまにか40代にまで至って、我を振り返ってみると、未だ40才だと云う年には見えず恥かしく思っている。未だ人生の苦労が足りないのでなあと反省しています。人生を良くマラソンにたとえられるが、40代はマラソンで云う折返し点を少しすぎた地点であり、もっとも苦しいところで、このあたりは日頃の練習の成果の良し、悪しがはっきりでるところと聞いている。まさにこの地点にさしかかったわけであり、今後何かにつけて試みられる責任の重い時期である。一方肉体は老化が始まり、無理ができない時でもある。その前ぶれか、学生時代、一日として欠かさず運動していた

好きな卓球を15年以上もやめている為か、少し無理すると身体のあちら、こちらが痛みだし、悪くなったり、疲れが残る様になってきた。運動不足であることも事実である。何か手軽にできるスポーツを考えなければと思っている。

私の40代は、身辺と、社会情勢共ども、不安で大変な年であろうと思っている。特に今日の不況は技術的な欠点によるものでないばかりか、その対策すら即効性妙薬がないと云われている。或る知人など、去年の今ごろ、毎日7、8時までの残業で、日曜日、祝日も返上で働いていたが、今年に入って、会社も不況の波をかかり、命体を与えられ、且つ報酬カットの日が続くようになっている。これからだと云うのに、さびしく思います。明日はわが身か? 一日も早く景気の回復を願うものである。

いずれにしても40代になったらもう人生なかば、これから体力も精力も下り坂に向うので、今以上に気をつけて行きたいと思っています。この紙面を借りて40代を迎えるにあたり諸先輩の御指導を賜われば幸甚と存じます。

(筆者 工業化学科第6回卒業 パラマウント硝子  
工業KK課長)

## 職場から

野島 宏俊

家庭の事情で、水戸市に就職帰郷しなければならなかつたとき、自分の今まで修得した技能を何とか生かせるところはないものかとさがしまわつた。

こんな折、たまたま現在の会社の先代の知遇を得て就職することになった。当時は日本中が高度成長政策の波にのって振幅の激しいときがありました。当社も殺到する工事申し込みを充分に消化出来る陣容ではなく、技術面を担当する私としては大いに困惑しました。しかし、座して待つわけにも参らず、取敢えず、母校に馳せ参じ、無理な求人を依頼しました。

社としては、高卒でも良いから、先に人員の確保をしたいとの意向が強かったのですが私には、期するところがあつたので、どうしても学卒を補充したかった。幸い、私共の会社もその後順調に営業成績を伸長して現在では県下で最上位級にランク付されています。これと云うのも、会社が若いために、社風も明るく、闊達で、社員が明日に希望を持って働いていること、又、社の意志が社員各自に充分通じていること。更に学卒のもつてゐる業務遂行能力を充分發揮していること。などが大きな要素になつています。

業務上特に必要なことは、企画・設計・現場の各部で外部との円滑なる対話が出来得ることであります。学卒者は、この芸当が出来るべきであり、又私の期待に応えて、充分よくやってくれています。

後輩は6年程前から年に1~2名づつ入社し、目下11名在社しています。(筆者 機械工学科第12回卒業 飯島設備工業KK 専務取締役)

## 郡工桜門会

小林 広規

「……我らが母校。」と全員が起立して齊唱する。その顔頬には、若き日の血潮が湧き立つ。福島県立郡山工業高校、桜門会総会のひとこまである。日本大学工学部のお膝元に勤務する我ら同窓生は、母校の名誉と伝統をより発展すべく、職務に、学問に研鑽を続いている。

現在会員は17名(建築科3名、機械科4名、電気科5名、工業化学科3名、普通科2名)で、会員の親睦を最大目的として、会の運営に当たっているが、その中心をなす行事は、年1回の総会、歓送迎会、冠婚葬祭の援助であり、他は機に応じて、さまざまな行事をもつことにしている。特に冠婚葬祭においては、郡工桜門会より、花環、祝弔電をおくり、仕事の面でもあらゆる援助を行なうので、会員に感謝され、親密感も深まっている。

会員の大部分は、30代から40代前半の年令であり、今一番の働き盛りで、郡工教諭陣の中心的位置をなしている。日大で鍛えられた学問と技術は、工業高校の資質を高め、生徒の信頼を得て、我々に大きな自信となつてゐる。本校においても日大進学を希望する生徒が年々増加し、後輩を送る喜びを味わっている。本年は特に、日大高師卒の大先輩である校長先生を会員に

お迎えして、一同元気に張りきつてゐる次第である。

春の花見、青葉の眺め、五月雨の憂さを吹きとばす暑氣払い、秋の月見、觀楓、雪見と、我々の親睦は続くが、今後は、更にこの会を発展させるために、建築の先生担当による福島県内の有名建築物の見学、国語の先生による「奥の細道自然歩道」の探索等を計画しており、これには、先生方ばかりでなく、奥さん方にも親睦と勉強をかねて参加出来るように計画している。

とにかく楽しく団結した郡工桜門会である。

(筆者 昭和32年日本大学文理学部卒業 福島県立郡山工業高等学校教諭)

## 雑感

浅田 良孝

小生土木屋に成る事を夢みて、あの桜の満開であった校門を父と併にくぐったのが先日の事の様に思われます。しかし早いもので社会に出て7年が過ぎてしましました。学生時代の悪業の数々を思い出し、懐かしんで書いてみますと、種々の事がありましたが最大の出来事は、大学4年生の時父が他界し、土木屋に勤める事もなく卒業して直に名古屋にて小さな貸布団店富紗屋の後継となりました。相談相手になってくれる悪友達ともなかなか会えず、こんな事なら地元の学校に行つた方が良かった位だと、無類の酒好きな私は一人で一杯やりながら思う事もありました。

そんな折、校友会東海支部の会合が開かれ出席してみると、先輩、後輩が皆一つの下宿にて雑談している様で懐かしく学生時代が思い出されました。あの先輩は昔、出歯亀目に行って肥溜に落ちた事のある人だと、その先輩を今見ますと、とても想像出来ない様な話が飛び出し、あの樂しかった優雅な学生時代に戻った雰囲気を味う事が出来、又一度に多くの先輩、後輩諸氏に知り合う事が出来心強いかぎりありました。

そんな切掛けにて、小生の近くに見える平野先輩(土木3回)、河野先輩(土木6回)よりゴルフを教えてもらう事になり現在特訓中でありますが、始め薦められた折には内心ゴルフをするような年寄でもないのと思っておりましたが、平野先輩より先ず筆おろしにと小生と下里君(土木19回)とが連れられてコースを廻って見ますと、思うようにボールは飛ばず土が飛ぶ有様、こんな事ならクラブより鍼を持って来た方が良かったかなと思いつつやっとの思いでホールイン。結果は134打ち足の痛い事、疲れた事この上なしである、しかし終わった後のビールの旨かったこと、そして自分自身の足が弱っている事に気付き正直言ってガックリしました。

これも車社会の影響かと勝手に考えておりますが、思うに卒業して現在に至るまで年月が過ぎ去り、気が付けば身体が弱り年老いてしまう様な事のない様に毎日毎日の健康管理を行わなければ大変な事になると痛感した次第です。校友諸氏におかれましても、身体に慢心する事なく健康に気を付け、社会において十分に実力を發揮出来ます様お祈り申し上げます。

又、校友会発展の為に努力しておられる校友諸兄に、心から厚く御礼申し上げます。

(筆者 第16回土木工学科卒業)

## 教育実習生として

日本大学工学部 阿部 正巳  
電気工学科4年

教育実習生として、母校で11月11日から、11月25日までの2週間、校長先生をはじめ学部卒業の先輩の諸先生方の指導を受ける事になりました。今日はちょうど半分の日程が過ぎたところです。卒業してからもう4年が過ぎようとしていますが、母校は非常にりっぱになり、さらに躍進を続けています。私は在学中先生方に迷惑をかけた方で、そしてまたこの2週間お世話になることになり、なぜか心が痛みます。現在、学生として指導される立場であり、更に教生として後輩を指導する立場ですが、指導する重要さと、むづかしさを感じられ、考えただけでも頭が痛くなります。ベラン先生の授業を参観させていただき、できるだけ見習おうとしても、いざ教壇に立ちますと、どの時間もどの時間も、満足できる授業はなく、生徒には非常に理解に苦しむ様子が見られます。よく考えてみると、指導の先生方ばかりでなく、生徒にも迷惑をかけてい

るのではないかと思い、反省すべき点を一つづつ減らしていくこうかと思うのですが、そううまくいかないのが現状で、悩んでしまいます。授業法の勉強不足や、教材研究の不充分、生徒の実態をつかめず自己中心の授業に落ちこんだり、指導書通りにやろうと、あせりすぎて、反対に何も教える事ができなかったり、こうして反省すべき点をあげますと、限りありません。これらは全部授業の基本となるものばかりですので、恥かしい限りです。2週間という短い期間内には、学ばなければならない事がたくさんあります。私の苦労などは、先生方の苦労に比べますと、まだまだですが、しかし先輩諸先生方の親切な指導と、生徒が親しく接してくれますことがなによりの救いとなっています。特に私にとって心強いことは、自分の卒業した母校であることと、学部卒業の先輩の先生方がかなり居り、いろいろと親切に、指導してくれることです。同じ学部で学んだと云うことを通して、先輩、後輩の間の大好きな絆の存在と云う、もう一つの大切なものを実感し得たことは、得難い、経験がありました。

(筆者 福島県立白河農工高校卒業後日本大学工学部へ進学)

### 事務局だより

日本大学工学部校友会  
会員各位

### 昭和50年度総会通知

校友の皆様には益々ご健勝にて御活躍のこととお慶び申し上げます。  
さて、校友会会則第29条により日本大学工学部校友会昭和50年度定期総会を下記により開催いたします。  
については先輩・後輩をお誘いになられ多数御出席下さいよう御通知申し上げます。

なお、欠席の方は議事一切について委任なされたものと認めますので御了承お願いいたします。

#### 記

- |            |   |
|------------|---|
| 1. 日 時     | 昭和50年4月20日(日) 午後1時から  |
| 2. 場 所     | 熱田家 郡山市賀成2丁目(賀成館前)  |
| 3. 付 議 事 項 | 第1号議案 昭和49年度会務報告<br>第2号議案 昭和49年度会計決算報告<br>第3号議案 昭和50年度事業計画並びに予算案審議<br>第4号議案 昭和50年度役員選出<br>第5号議案 その他 |

追伸 諸経費節減のため校友会報第26号に掲載の上記案内によって総会通知に換えさせていただきます  
ので御諒承願います。

日本大学工学部は、学園整備計画の一環として、既設の東磐梯寮に増改築工事を行なってい  
たが、12月16日無事開寮の運びとなった。居室は小部屋を多くし、ミーティングルームも備え  
た本格的な厚生施設であり、本学関係者(校友)は1泊三食付1,200円と格安である。御利用下さい。  
申込先: 本学、庶務課。

### 終身会費納入お願い

わが校友会は、母校の発展と校友各位の向上親睦を図ることが目的であり、会員皆様の会費が運営の根源であります。何卒この点を御理解になられて、未納の方は下記何れかの方法により御納入お願いいたします。

#### 記

##### I 送金の場合

- (1) 現金書留か、小為替による方法
- (2) 郵便振替 — 郡山1990の口座番号による。

##### II 現金納入 — 直接校友会事務局で取扱います。

### 校友会報第26号

発行所 福島県郡山市田村町徳定字中河原1  
日本大学工学部校友会  
電話 郡山(0249) 44-1327  
振替口座番号 郡山1990番  
郵便番号 979-66  
発行日 昭和49年12月10日  
発行者代表 事務局長 佐藤光正  
編集者代表 事業部長 根本年雄